

是ハ信濃國ハ極風早キ所也仍テスハノ明神ノ社ニ風祝ト云物ヲ置テ是ヲ春ノ始ニ深物ニ籠居テ祝シテ百日之間尊重スルナリ然者其年凡風閑ニテ爲農業吉也自ラスキマモアリ日光モ令見ツレバ風不納云々其意也是ハ能登大夫資基ト云人俊頼ニ語云如此事承之歌ニ讀ト思也云云俊頼答云無下ノ世俗事也如此事更々不可詠不便云々仍存其由之處後日詠之尤腹黑事歟五品後悔云々

〔萬寶鄙事記占天氣〕風 七八月大風ふかんとては必虹のごとくにしてきたる雲たつこれを

颯ササ母モといふ、冬日くれて風和かになる時は明朝も又風はげし、日の内に風おこるはよし、夜おこるはあし、日のうちに風やむはよし、夜半にやむはあし、これは寒天のときの事なり、

東風急なるは蓑笠をそなふべし、東北風も雨南風はその日たちまちにふらず、明る日か其暮にか必あめふる、西風北風はおほくは晴、北風は西風よりいよくよし、但し春北風ふけば時雨多し、秋は西風にて雨ふる、南風は四時ともに雨ふる、南に海ある所は、南風にも雨ふらずといふ所有、東に海をうけたる所も同じ、乾風はかならずはる、故に、いぬる風を日吉と云、冬南風ふけば、二三日の間にならず雪ふる、風西南より轉じて、西北風になれば彌大なり、孫子曰、ひるの風はひさしく、よるのかせはやむ、大風ふかんとては、衆鳥空に鳴てひるがへり飛て、群魚水面におどり、星うごき、日月に暈有て、雲きれたにしてとぶ、其色白く黄にして、あつまり散る事さだまらず、雲日をめぐり、雲のあし黄にして、行事はやし、正二月に北風吹ば、必雨そふ物也、西風久しければ火災有物をかはかす故なり、西北風もつとも火災のうれへあり、○中知風草といふ草有、和名をちから草共、風ぐさとも云、かやに似たり、其ふしの有無を見て、そのとし大風の有無をえ、節一ツあれば其年一度大かせ吹、二ツあれば二度ふく、三ツあれば三度ふく、本にあれば春ふく、中にあれば夏秋ふく、末にあるときは冬大風有、